

研究論文

知的障害特別支援学校における伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」に関する一考察

一特別支援学校学習指導要領知的障害各教科の「思考力、判断力、表現力等」の目標との関連から一

小野 真智子*・ 山北 史隆*・ 後藤 滋夫*・ 芳野 正昭**

A Consideration of Developing Children's Ability to Think, Judge, and Express in Special Needs Schools for Intellectual Disabilities

：From the Relationship with Objectives of Each Subject in Curriculum Guideline for Special Needs Schools

Machiko ONO, Fumitaka YAMAKITA, Shigeo GOTOU, Masaaki YOSHINO

【要約】本校職員の意識調査を基に整理した【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】と特別支援学校学習指導要領に記載された知的障害である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科（以下各教科）の「思考力、判断力、表現力等」の目標を照合したところ、両者の関連は大きいことが考察された。授業作りにおいては、教科別の指導でも各教科等を合わせた指導でも、各教科での目標設定や評価を行うが、総合的な力である【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の育成を見据えた取組が重要である。

【キーワード】伸ばしたい「思考力・判断力・表現力」、知的障害特別支援学校各教科目標、事象の捉え、課題解決に向かう計画、コミュニケーション

1 研究目的

本校では平成29年に公示された学習指導要領の趣旨を踏まえ、カリキュラム・マネジメントの推進をテーマに平成30年度から令和3年度まで研究に取り組んできた。その中で、教育課程、年間指導計画、単元計画、指導略案（本時案）の計画－教育実践－評価をサイクルとした「佐大附特システム」を確立した（佐賀大学教育学部附属特別支援学校2022）。「佐大附特システム」では、各教育計画の作成にあたって、取り扱う各教科の内容を明らかにし、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で示される資質・能力の育成をねらうとともに、観点別の評価を行うことを重視してきた。

しかし、本校職員からは「思考・判断・表現」の学習評価が不十分であるという声が多く挙がった。また、各教科の見方・考え方を踏まえた資質・能力の育成と、児童生徒の現在及び将来の生きる力を育むこととの関連が分かりにくいとの意見も多く、研究の課題として残ることになった。

この課題を踏まえ、令和4年度からは知的障害教育における「思考力、判断力、表現力」の育成に焦点を当てて校内研究を進めている。研究を進めるにあたって、本稿では、本校職員が児童生徒の現在及び将来の生きる力となる「思考力、判断力、表現力」をどのように捉えているか意識調査を元に整理し、各教科の目標との関連について分析した結果を報告する。

2 研究方法

本校職員の「思考力、判断力、表現力」育成に関する意識調査の調査項目として「児童生徒の普段の姿を見て、『思考力、判断力、表現力』の育成が不十分であると考えること」「今後伸ばしていきたい『思考力、判断力、表現力』」2項目を設定した。この調査における「思考力、判断力、表現力」は、教師が各教科で示された「思考力、判断力、表現力等」の目標及び内容にとらわれず、「児童生徒の現在及び将来の生活において必要である」と考えた総合的な力とした。各項目の回答は記述式とした。教師が各々回答した意識調査を持ち寄って、5～6名程度のAからDの4グループを編成して話し合い、グループごとに検討した結果をまとめた回答を作成した。今回、教師1人1人の意見を直接集約せずに、グループでの回答を集約することとしたのは、教師間の本校で

* 佐賀大学教育学部附属特別支援学校

** 佐賀大学教育学部

の経験の差が大きく、本校の課題となる事項の気付き自体に差があり、意識調査に回答することが難しい教師もいることが予想されたためである。グループ内で協議し他の教師の意見を聞くことによって、各教師の課題意識がより明確になると考えた。

次に、集約した調査項目の回答を分析し傾向を明らかにする。分析した結果を、児童生徒の現在及び将来の生活において必要となる【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】としてまとめ、さらに学習指導要領に示された各教科の目標との照合を行うこととした。

本校では、学習単元を計画する際は、教科別の指導だけではなく、各教科等を合わせた指導においても、各教科等の内容から指導内容を選定した上で単元目標や個人目標を設定している^註。そのため、単元の目標が達成されることと、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の関連が図られることが重要であると考え、この取組を行うこととした。

3 意識調査結果

各グループで作成した意識調査の回答は以下の通りである（表1）。

〈表1 職員意識調査の各グループの結果〉

Aグループ	
児童生徒の普段の姿を見て、「思考力、判断力、表現力」の育成が不十分であると考えること。	
<ul style="list-style-type: none"> ・教師からの働き掛けを待つ、指示待ちの児童生徒が多い。 ・自分から困った時に教師に支援を求めることが難しい。 ・気持ちや考えについて質問しても、応答することができない。 ・教師の指示の後に「分かりましたか」と確認すると、「はい」と答えるが、「分かったことを言ってください。」の質問に答えることができない。 ・自分の行動や回答を振り返ることが少ない。 ・やりっぱなしで間違っているにもかかわらず修正することが少ない。 	
今後伸ばしていきたい「思考力、判断力、表現力」	
<ul style="list-style-type: none"> ・その時に状況に応じて、課題をクリアするために自分の行動を考える力。 ・優先順位を考えて行動する力や、今、すべきことに注意を向け続ける力。 ・分からないことや自分では難しいことを判断して、自分から質問したり、援助を求めたりする力。 ・できれば相手に分かりやすい方法で、自分の意見を何らかの手段で表出する力。 ・オープンクエスチョンに答える力。 ・自己満足せずに、新たな課題を見つけて取り組もうとしたり、よりよく行動しようとしたりする力。 ・今後につながるように、体験や経験を積んで興味関心を広げる力。 ・ミスを恐れずに挑戦する力。 ・自分の意見と他の意見を比較し、よりよい方を選択する力。 	
Bグループ	
児童生徒の普段の姿を見て、「思考力、判断力、表現力」の育成が不十分であると考えること。	
<ul style="list-style-type: none"> ・自分で取り組むべきことを考えたり、決めたりする力が足りていない。また、教師側が事前に決めてしまっていることが多い。 ・「予測」「考察」など先のことを考えるということは少ない。 ・困り感を言葉にして伝える力が弱い。困っていることは伝わるが、「何に困っていて、どんな支援が必要か。」を教師が捉えることが難しい。 ・非日常的な事案(災害等)やハプニング、場面変更などに対して、自分で困り感を表出したり、大人に連絡・報告したりして対応する力が弱く、混乱したり、指示待ちになったりする。 	

Bグループ

今後伸ばしていきたい「思考力、判断力、表現力」

- ・どうすれば解決できるか考える力。
- ・周りの人に関わっていこうとする力。
- ・自分で気づき、考え、行動する力。
- ・周囲の人に支援を求める力
- ・自分なりの方法で、自分の困り感を周りに伝えるなど、その場面に合わせた表現力。
- ・状況を受け入れ、自分のことを周りに伝える力。
- ・分からない時に周りの人に相談し、それをヒントに考え、行動する力。
- ・場面変更、自然事象や事故など、いつもと異なる事象や出来事を受け入れ、対応する力。
- ・流れや周りの仲間の動きに合わせる力。
- ・学習活動を振り返って次の学びへつなげる力。

Cグループ

児童生徒の普段の姿を見て、「思考力、判断力、表現力」の育成が不十分であると考えること。

- ・質問や依頼を表出することはできるが、少し考えて「自分で何とかしよう」とか「何度もチャレンジするとかの姿勢が少ない。
- ・指示待ちの場面が多い。
- ・試行錯誤する経験が少ない。
- ・「できた」という充足感が足りていないのではないかな。
- ・生徒なりに考えている場面はあると思うが、教師側が捉えきれいていないと感じる。

今後伸ばしていきたい「思考力、判断力、表現力」

- ・過去の経験(身につけたこと、学習したこと)を生かして、自分から行動を起こす力。
- ・自分なりに考えて決め、行動する力。
- ・得た情報から予測したり、想像したりする力。
- ・理由を説明する力。
- ・これをしたいという欲求や、このようになりたいという願望に向かって、一心に努力していく力
- ・主体的に「自分でやってみよう」と考え、取り組む力。
- ・周囲に相談し協力を得ながら、実現するために計画を立てる力。
- ・できることや分かったことを般化させたり、応用・創意工夫したりする力。
- ・既成の概念やルール、マナーなどを知り理解した上で、新しい様式や考えを生み出す力。
- ・試行錯誤する力。
- ・間違いを恐れず、自分で判断しようとしたり、行動を起したりする力。
- ・伝えたいことを、もっている力で自ら発信する力。
- ・人が選んだことを認識したり、同様の意見等を意識したりするなど、周囲の人に関心を向け、協力して働く力。

Dグループ
児童生徒の普段の姿を見て、「思考力、判断力、表現力」の育成が不十分であると考えること。
<ul style="list-style-type: none"> ・相談する力が足りていない。 ・けがや病気などの時に自分の体の状況を伝えることが難しい。 ・あきらめずに物ごとに取り組んだり、試行錯誤したりする姿が少ない。 ・「こうしたい」に向けて計画して、実行することが難しい。 ・「これをしたらどうなるだろう」「これからどんなことが起こるだろう。」など、ちょっと先を想像することが難しい。
今後伸ばしていきたい「思考力、判断力、表現力」
<ul style="list-style-type: none"> ・足りていないと挙げた力が、そのまま今後伸ばしていきたい力である。 ・自分の体や心の状態を、何らかの方法で伝える力。 ・自己選択・自己決定し、その結果について受け入れて自己責任を果たす力。

意識調査の回答結果を見ると、育成が不十分であると考え「思考力、判断力、表現力」と、今後伸ばしていきたい「思考力、判断力、表現力」は重なっている項目が多いことが分かった。「思考力、判断力、表現力」について現時点で育成が不十分だと感じるため、これから伸ばしていきたいと考えており、それは視点を変えると、児童生徒の現在及び将来の生活において必要な力であるからこそ、現時点では到達点には至っていないと教師が捉えていると考えられる。

さらに、回答の中には「思考力、判断力、表現力」そのものではなく、「周囲の事物や人に関心を向けようとする力」「粘り強くチャレンジを続ける力」など、育成を支える力と捉えられるような回答もあった。「思考力、判断力、表現力」が幅広くイメージされているため、そのような混同が現れたと考えられる。しかし、これら「思考力、判断力、表現力」の育成を支える力についても、本校における「思考力、判断力、表現力」の育成に関する整理を行っていく上では、重要な視点であると考えた。

以上のことから、各グループの調査結果を【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】（表2）、【「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力】（表3）、の2点でまとめた。

〈表2 【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】〉

1 周囲の事象の 捉えに関する もの	①	周囲の物事や変化に気付く力
	②	周囲の状況を受け止め、対応しようとする力
	③	相手の伝えようとすることや言葉・文章や記号等が意味することを受け止め、対応しようとする力
	④	ちょっと先の事象を想像したり、行動の結果を予測したりする力
	⑤	出来事や行動の理由や背景を説明する力
	⑥	事物の共通の特徴に気付いたり、特徴に基づいて分類したりする力
2 課題解決に向 けた計画に関 するもの	⑦	自分で課題を見付けて、取り組むべきことを考えたり決めたりする力
	⑧	もっている知識や技能を他の学習や場面でも使う力
	⑨	課題解決に向けて計画する力
	⑩	優先順位をつけるなど条件に応じて計画する力
	⑪	遂行途中でも状況に合わせて計画を変更したり、立て直したりする力
	⑫	試行錯誤しながら解決に取り組む力
	⑬	自分の活動や学習を振り返り、評価する力
3	⑭	伝えたいことを発信する力
	⑮	様々な方法でコミュニケーションをとる力

コミュニケーションに関するものの	⑯	依頼の場面等で、困っていることや必要な支援について説明する力
	⑰	自分から相談する力
	⑱	自分の考えと他者の考えを見比べる力

表2では【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】について大きく3つに分類した。周囲の事物や変化に気付く力、ちょっと先の事象を想像したり、行動の結果を予測したりする力などは、「1 周囲の事象の捉えに関するもの」としてまとめた。優先順位をつけるなど条件に応じて計画する力、遂行途中でも状況に合わせて計画を変更したり、立て直したりする力などは、「2 課題解決に向けた計画に関するもの」としてまとめた。様々な方法でコミュニケーションをとる力、自分から相談する力などは、「3 コミュニケーションに関するもの」としてまとめた。

【「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力】については、「自主性・主体性」「人との関わり」「興味・関心」「チャレンジ精神」「自己選択決定・自己責任」などがキーワードとして挙げられた。

〈表3 【「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力】〉

自分から行動を起こそうとする力
人任せではなく、自分で課題を解決しようとする力
周囲の人と関わり、他者と気持ちを通じ合わせようとする力
周囲の事物や人に関心を向けようとする力
自分の思いや考えを調節しながら友達と協力して解決に取り組む力
興味・関心を深めたり広げたりしようとする力
間違いや失敗を恐れずチャレンジする力
粘り強くチャレンジを続ける力
よりよいものにしよう、向上しようとする力
自分の選択や決定に対して、自分で責任をもとうとする力

4 学習指導要領各教科との目標との関連

次に、整理した【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】と、各教科の「思考力、判断力、表現力等」の目標との関連を探った。まず、分類の項目として挙げた「1 周囲の事象の捉えに関するもの」「2 課題解決に向けた計画に関するもの」「3 コミュニケーションに関するもの」の中から、「周囲の事象の捉え」「課題解決・計画」「コミュニケーション」をキーワードとして挙げ、このキーワードと照合させながら、各教科の「思考力、判断力、表現力等」の目標の表記を確認した。キーワードと類似性や関連性があると思われた各教科について、さらに学部段階の目標の表記の確認を行うようにした。

(1) 「周囲の事象の捉えに関するもの」と学習指導要領各教科等の目標との関連

まず、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「1 周囲の事象の捉えに関するもの」と各教科の目標のうち類似していると考えられるものを挙げた。「周囲の事象」とは、児童生徒の身の回りの物や人、出来事などである。生活科の目標では「自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然」と表記されている。中学部の段階では「身近な人々、社会」は社会的な事象として社会科で示されている。生活科での「自然」は、「生命」・「地球・自然」・「物質・エネルギー」と扱う対象を広げ理科の中で示されている。そこで、生活科及び社会科と理科の目標から「周囲の事象の捉えに関するもの」と関連する表記を抜き出した(表4)。

〈表4 生活科、社会科、理科の「思考力、判断力、表現力等」の目標のうち、「1周囲の事象の捉えに関するもの」との関連の大きい表記〉

生活科	小学部			
	自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりについて理解し、			
	1段階	2段階	3段階	
	自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりについて関心を持ち、	自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりについて気付き、	自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりについて理解し、	
社会科	中学部		高等部	
	社会的事象について、 <u>自分の生活と結び付けて具体的に考え</u> 、		社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、 <u>自分の生活と結び付けて考えたり</u> 、	
	1・2段階		1・2段階	
	社会的事象について、 <u>自分の生活や地域社会と関連付けて具体的に考えたことを</u>		社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、 <u>自分の生活と結び付けて考える力</u>	
理科	中学部		高等部	
	観察、実験などを行い、疑問をもつ力と予想や仮説を立てる力を養う。		観察、実験などを行い、解決の方法を考える力とより妥当な考えをつくりだす力を養う。	
	1段階	2段階	1段階	2段階
	主に差異点や共通点に気付き、疑問をもつ力を養う。	疑問をもったことについて既習の内容や生活経験を基に予想する力を養う。	主に予想や仮説を基に、解決の方法を考える力を養う。	主にそれらの働きや関わり・変化や関係・性質、規則性及び働きについて、より妥当な考えをつくりだす力を養う。

周囲の事象を「捉える」ことは、生活科の目標において「理解し」と表記されている。さらに段階で見ると小学部1段階では「関心を持ち」、2段階では「気付き」、3段階で「理解し」と表記されており、「周囲の事象の捉え」として、事象に関心に向け事象の存在に気付くことから始まり、次に事象を理解することが求められていることが分かる。これは【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「周囲の事象の捉えに関するもの」の中でも「①周囲の物事や変化に気付く力」や「②周囲の状況を受け止め、対応しようとする力」との関連が大きいと考えた。

また生活科では、周囲の事象と「自分との関わり」について理解することが求められており、社会科の目標の「自分の生活と結び付けて考える」につながっていることが分かる。自分自身のことや身近な事象に対して関心に向けて気付き、気付いたことと自分との関わりを考える小学部段階から、理解した事柄を自分の生活に取り込み、自分の生活を起点にさらに広い社会的事象について、自分の生活と関連させながら捉える中学部・高等部段階へと発展していることが分かった。さらに、社会科の高等部の目標には、「社会的事象の相互の関連、意味を多角的に考える力」と表記されており、自分と対象の事象との関連だけではなく、対象と対象の関連について考えることが求められていることが分かった。そのためには、自己の視点だけでなく、他者の視点や立場に立って事象を捉える力も必要となる。

「思考力、判断力、表現力」を育成する上で、周囲の事象をどのように捉えるのかということは大変重要となる。周囲の事象の捉えには、気付きから理解へ、事象と自分との関係性の理解から、事象相互の関連性の理解へという段階性があり、実際の指導においては、児童生徒の習得の状況や発達段階に応じた丁寧な目標設定をする必要があると考える。

次に理科の目標については、中学部1段階の「事象を見比べて差異点や共通点に気付く」の表記に着目した。社会では事象間の関係性の理解は高等部段階で求められているが、理科では事象間の関係性の理解が中学部1段階で求められていることが分かった。理科では、観察や実験など児童生徒が自分で見たり聞いたり操作したり体験したりして実感した上で、事象間の関連に気付くことが重視されている。さらに、実験など自分で働きかけた上で、その結果としての事象の変化を捉えたり、継続的な観察など事象の経時的な変化を捉えたりすることが求められている。これは、出来事の因果関係を捉えることにつながり、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「④ちょっと先の事象を想像したり、行動の結果を予測したりする力」との関連が深いと考えた。このような「結果をイメージした上で、事象の変化に着目したり、自分が対象に働き掛けて状況の変化を捉えたりして、結果を認識する」という経験の積み重ねは、「⑤出来事や行動の理由や背景を説明する力」を育成する上でも必要となると考える。

【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「1 周囲の事象の捉えに関するもの」のうち「③相手の伝えようとすることや言葉・文章や記号等が意味することを受け止め、対応しようとする力」との関連が大きい教科として国語科を取り上げて「思考力、判断力、表現力等」の目標を確認した（表5）。

〈表5 国語科の目標のうち、「③相手の伝えようとすることや言葉・文章や記号等が意味することを受け止め、対応しようとする力」との関連の大きい表記〉

国語科	小学部	
	日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思考力や想像力を養う。	
	1段階	2段階
	言葉をイメージしたり、言葉による関わりを受け止めたりする力	言葉が表す事柄を想起したり受け止めたりする力

小学部1段階には「言葉のイメージの受け止め」、2段階には「言葉が表す事項の想起や受け止め」と表記されている。「言葉・文章や記号等が意味すること」の具体的な内容は、国語科の「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」の内容として示されている（表6）。なお、内容には「伝えたり表現したりすること」として表記されているものもある。表出できるということは受け止めることができるものであると考え、表に含めて示すこととした。

〈表6 国語科の内容のうち「言葉・文章や記号が意味すること」に関連する表記〉

学部 段階	言葉・文章や記号が意味すること	表記場所
小1段階	事物の内容を表していることそのものを感じ取る	「知識及び技能」
小学部 2段階	気持ちや要求、物の名前や動作	「知識及び技能」
	体験したこと	聞くこと・話すこと
	登場するものや動作、時間の経過	読むこと
小学部 3段階	事物の内容	「知識及び技能」
	出来事など、見聞きしたことのあらまし、自分の気持ち	聞くこと・話すこと
	登場人物の行動や場面の様子、時間的な順序	読むこと
中学部 1段階	事物の内容、経験したこと	「知識及び技能」
	話の大体、見聞きしたことのあらまし、自分の意見	聞くこと・話すこと
	情景や場面の様子、登場人物の心情、時間的な順序や事柄の順序	読むこと
中学部 2段階	考えたことや思ったこと	「知識及び技能」
	見聞きしたことや経験したこと、自分の意見やその理由	聞くこと・話すこと
	情景や場面の様子、登場人物の心情、出来事の順序や気持ちの変化	読むこと
高等部 1段階	考えたことや思ったこと	「知識及び技能」
	話し手が伝えたいこと	聞くこと・話すこと
	登場人物の行動や心情、考えとそれを支える理由や事例との関係	読むこと
高等部 2段階	登場人物の相互関係や心情、事実と感想、意見などとの関係、文章全体の要旨	読むこと

表からは、児童生徒には発達段階や教科の内容の習得の状況に応じて「相手の伝えようとすることや言葉・文章や記号等が意味すること」を受け止めることが求められていることが分かる。それは言い換えると、教師側には児童生徒が受け止めやすいように、実態等に応じて伝えたい事柄や伝えたい意図を整理して提示することが求められているということも示されていると考える。

【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「1 周囲の事象の捉えに関するもの」のうち「⑥事物の共通の特徴に気付いたり、特徴に基づいて分類したりする力」については、算数・数学科との関連が大きいと考えた（表7）。

〈表7 算数・数学科の目標のうち、「⑥事物の共通の特徴に気付いたり、特徴に基づいて分類したりする力」との関連の大きい表記〉

科 算 数 ・ 数 学	小学部	中学部	高等部
	日常の事象の中から数量や図形を直感的に捉える力、基礎的・基本的な数量や図形の性質などに気付き感に取る力、	日常の事象を数理的に捉え見通しをもち筋道を立てて考察する力、基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見出し統合的・発展的に考察する力、	

数理的な視点で捉えられる事物の共通の特徴として、数量や図形等の性質が示されている。小学部では、日常の事象の中から数量や図形の性質に直感的に気付いたり感じ取ったりすることが求められ、中学部高等部では日常の事象の中から見出すことが求められている。見出すには、意図的に日常の事象を数理的な視点で見ることが必要であると考え。

気付いたり感じ取ったり見出したりした性質を用いて、「分類する」を初めとしてどのように思考しながら操作するかについては、小学部段階の目標の中で示されている（表8）。

〈表8 算数・数学科の各学部段階の目標のうち、「⑥事物の共通の特徴に気付いたり、特徴に基づいて分類したりする力」との関連の大きい表記〉

学部段階	思考上の操作	項目
小学部 1段階	身の回りにあるもの同士を対応させたり、組み合わせたりするなど、数量に関心をもって関わる	数量の基礎
	数を用いて表現する	数と計算
	量の大きさにより区別する	測定
小学部 2段階	具体物や図などを用いながら数の数え方を考え表現する	数と計算
	分類したり集めたりする	図形
	一方を基準として他方と比べる	測定
	共通の要素に着目し、簡単な表やグラフで表現する	データの活用
小学部 3段階	数の数え方や計算の仕方を考え表現する	数と計算
	重ねたり移動させたり具体的に操作をして考える	図形
	目的に応じて量を比較する	測定
	比較のために簡単な絵や図に置き換えたりして考える	データの活用

中学部と高等部の段階別の目標には、「数量や図形等の数理的な性質を用いて考察したり、表現したりする。」と表記されており、この表記から具体的な操作として捉えることは難しいので、ここでは実際の操作として見て取れる小学部段階の表記を確認した。表に示すとおり「分類する」だけではなく、「対応させる」「組み合わせる」「区別する」「数・図・グラフや表で表現する」「集める」「重ねたり移動させたりする」「比較する」「絵や図に置き換える」などがあり、「分類する」だけにとどまらず幅広いことが分かった。

実際の指導にあたっては、児童生徒一人一人の実態を踏まえ、具体的な「思考力、判断力、表現力等」の目標と評価規準を設定しなければならない。「分類する」を含めた表8中の表記を参考とすることができると考える。

(2)「課題解決に向けた計画」に関するものと学習指導要領各教科等の目標との関連

学校教育法には「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」と示されている。このことから「思考力、判断力、表現力等」とは「習得した基礎的・基本的な知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な力」とであると言える。【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「2 課題解決に向けた計画に関するもの」は、「思考力、判断力、表現力」の中でも中心的に検討すべきことであり、すべての教科に関連するものだと考える。本稿では、特に関連の大きい教科として、職業科（中学部段階の職業・家庭科の職業分野）と家庭科（中学部段階の職業・家庭科の家庭分野）を取り上げた（表9）。

〈表9 職業科、家庭科（職業・家庭の職業分野と家庭分野）の目標のうち、「2 課題解決に向けた計画」との関連の大きい表記〉

職業科 (職業分野)	中学部		高等部	
	将来の家庭生活や職業生活に必要な事柄を見いだして課題を設定し、解決策を考え、 <u>実践を評価・改善</u> し、自分の考えを表現するなどして、課題を解決する力		将来の職業生活を見据え、 <u>必要な事柄を見いだして課題を設定し、解決策を考え、<u>実践を評価・改善</u>し、表現する力</u>	
	1段階	2段階	1段階	2段階
	将来の職業生活に必要な事柄について触れ、課題や解決策に <u>気づき、実践し</u> 、学習したことを伝えるなど、課題を解決する力の基礎を養う。	将来の職業生活に必要な事柄を見いだして課題を設定し、 <u>解決策を考え、実践し</u> 、学習したことを振り返り、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う。	将来の職業生活を見据え、 <u>必要な事柄を見いだして課題を設定し、解決策を考え、<u>実践を評価し</u>、表現する力を養う。</u>	

家庭科 (家庭分野)	中学部		高等部	
	将来の家庭生活や職業生活に必要な事柄を見いだして課題を設定し、 <u>解決策を考え、実践を評価・改善し</u> 、自分の考えを表現するなどして、課題を解決する力		家庭や地域における生活の中から問題を見いだし課題を設定し、 <u>解決策を考え、実践を評価・改善し</u> 、考えたことを表現するなど、課題を解決する力	
	1段階	2段階	1段階	2段階
	家庭生活に必要な事柄について触れ、課題や解決策に気付き、 <u>実践し</u> 、学習したことを伝えるなど、日常生活において課題を解決する力の基礎を養う。	家庭生活に必要な事柄について考え、課題を設定し、 <u>解決策を考え、実践し</u> 、学習したことを振り返り、考えたことを表現するなど、日常生活において課題を解決する力を養う。	家庭や地域における生活の中から問題を見いだし課題を設定し、 <u>解決策を考え、実践を評価・改善し</u> 、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う。	

職業科（職業分野）と家庭科（家庭分野）では、まず「課題を設定する」ことが重視されていることに着目した。中学部1段階では「課題に気付き」、それ以降の段階では「課題を設定し」と表記されている。課題とは、改善すべき生活上の問題点に加え、よりよく職業生活や家庭生活を送るために取り組むべき主題（テーマ）であると捉えることができる。よりよく生活するという思いの下に、自分の身の回りの様々な事象を捉える中で、必要な情報を捨選択し、課題を自分事として設定することが求められている。小学部生活科の目標の「身の回りの事象と自分との関わりについて関心をもったり理解したりする力」を土台として、そこから発展させた力であると考えられる。【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】「2 課題解決に向けた計画に関するもの」のうち「⑦自分で課題を見つけて、取り組むべきことを考えたり決めたりする力」との関連が大きい。

課題を設定した後は、課題の解決策を講じていかなければならない。中学部1段階では「解決策に気付き」、中学部2段階以降では「解決策を考え」と表記されている。中学部1段階では、自分だけで課題を設定したり、解決策を講じたりすることまでは求められておらず、実際の授業においては、教師側からの提示になることも多いと考えられる。しかし、中学部2段階以降は生徒が主体となる「課題設定・課題解決に向けた計画・実践・評価（振り返り）・解決策の改善」のPDCA サイクルに沿って学習を進めていくことが求められている。中学部1段階においても、教師と一緒に丁寧にPDCAの手順を踏み、課題を自分事として捉えることや解決に向けて計画することの重要性を実感できるようにしていくことが重要である。

このことは意識調査におけるグループ協議の中でも「児童生徒が混乱しないようにと、教師主導で課題やテーマ、解決方法も決めてしまっている授業が多いのではないだろうか。そのような授業の中では、児童生徒は活動の意味を十分実感できないまま、教師の指示に従って行動しているだけになっているのではないか。」という意見が上がり、検討が深められた。以上のことは、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「2 課題解決に向けた計画」に関するものの「⑧もっている知識や技能を他の学習や場面でも使う力」「⑨課題解決に向けて計画する力」「⑩優先順位をつけるなど条件に応じて計画する力」との関連が大きいと考える。

児童生徒が解決に向けて自ら計画・実践する姿を想定した時、実践と計画を細かく繰り返しながら状況に応じて課題解決に向かう力の育成も重要であるとの意見が出された。そこから「⑪遂行途中でも状況に合わせて計画を変更したり、立て直したりする力」「⑫試行錯誤しながら解決に取り組む力」が【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】として挙げられた。「⑪遂行途中でも状況に合わせて計画を変更したり、立て直したりする力」は、解決に向けての見通しをもち計画に沿って実践している途中でも、外的な要因で変更が必要となった場合に応じることができる力である。変更に応じられるだけでなく、解決のゴールを見失うことなく、再度計画を練り直すことが求められる。計画を練り直すためには、「課題解決に向けて、今、どこまで進捗しているか。」という、客観的な自分の活動の振り返りや評価が必要となる。「⑫試行錯誤しながら解決に取り組む力」は解決に向けて計画的に進めているものの、その方法だけに限らずよりよい方法を見出しながら、解決に努める姿である。また、解決に向けて具体的に計画する力はまだ弱いものの、ゴールや解決の方向性は見失わずに、様々な方法で取り組もうとする姿であるとも言える。こちらもその都度自分の活動を振り返り、評価・改善する力が必要である。そのため、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「2 課題解決に向けた計画」に関するものとして「⑬自分の活動や学習を振り返り、評価する力」も挙げられた。職業科や家庭科の目標には、中学部2段階には「学習したことを振り返り」、高等部1、2段階には「実践を評価・改善し」との表記があり、関連が大きいと考えた。

次に、理科の目標について確認した（表10）。中学部に「課題を設定する」と同義で「疑問をもつ」との表記がある。また、解決に向けた計画に関連する力として、中学部2段階には「予想や仮説を立てる力」、高等部1段階には「予想や仮説を基に、解決の方法を考える力」と表記されている。

〈表10 理科の目標のうち、「2 課題解決に向けた計画」との関連の大きい表記〉

理科	中学部		高等部	
	観察、実験などを行い、 <u>疑問をもつ力と予想や仮説を立てる力を養う。</u>		観察、実験などを行い、 <u>解決の方法を考える力</u> とより妥当な考えをつくりだす力を養う。	
	1段階	2段階	1段階	2段階
	主に差異点や共通点に気付き、 <u>疑問をもつ力</u> を養う。	<u>疑問をもったことについて既習の内容や生活経験を基に予想する力を養う。</u>	主に <u>予想や仮説を基に、解決の方法を考える力を養う。</u>	主にそれらの働きや関わり・変化や関係・性質、規則性及び働きについて、より妥当な考えをつくりだす力を養う。

「〇〇をしたら、〇〇となるだろう。」「時間が経つと、〇〇と変化するだろう。」という予想や仮説を立てる力は、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「1 周囲の事象の捉えに関するもの」の「④ちょっと先の事象を想像したり、行動の結果を予測したりする力」を土台として、育成されるものであると考える。(1)でも述べたが、「結果をイメージした上で、事象の変化に着目したり、自分が対象に何らかの働き掛けをした上で、状況の変化を捉えて結果を認識したりする。」経験を積むことにより、同様の状況になった際に結果を想起することができるようになる。また、状況が少し違っても似た状況を複数重ね合わせながら、結果を予想するようになって考えられる。そして、予想や仮説と異なった結果になったときに、「なぜだろうか。」

「状況や条件に何か違いがあっただろうか。」と、より深く出来事や状況の理由や背景について考えることになる。これは「1 周囲の事象の捉えに関するもの」の「出来事の行動の理由や背景を説明する力」ともつながる。このような周囲の事象の捉えに関する「思考力、判断力、表現力」を土台として、予想や仮説を立てながら課題解決に向けた計画に関する「思考力、判断力、表現力」が育成されていくということが考えられる。

図画工作科・美術科の目標(表11)には、「課題」や「解決」という表記はない。しかし、表したいことを思い付き、それに向けて表し方を考えたり、構想したりすることは、課題の設定と、その解決に向けた計画と同様のプロセスであると考えた。

〈表11 図画工作科・美術科の目標のうち、「2 課題解決に向けた計画」との関連の大きい表記〉

図画工作科・美術科	小学部			中学部		高等部	
	造形的なよさや美しさ、 <u>表したいことや表し方などについて考え、発想や構想をしたり、</u>			造形的なよさや面白さ、 <u>美しさ、表したいことや表し方などについて考え、経験したことや材料などを基に、発想し構想するとともに、</u>		造形的なよさや美しさ、 <u>表現の意図と工夫などについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、</u>	
	1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
	<u>表したいことを思い付いたり、</u>		造形的なよさや美しさ、 <u>表したいことや表し方などについて考え、発想や構想をしたり、</u>	造形的なよさや面白さ、 <u>表したいことや表し方などについて考え、経験したことや思ったこと、材料などを基に、発想し構想するとともに、</u>	造形的なよさや面白さ、 <u>美しさ、表したいことや表し方などについて考え、経験したことや想像したこと、材料などを基に、発想し構想するとともに、</u>	造形的なよさや美しさ、 <u>表現の意図と工夫などについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、</u>	造形的なよさや美しさ、 <u>表現の意図と創造的な工夫などについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、</u>

さらに、実際の授業においては他の教科以上に「⑫試行錯誤しながら解決に取り組む力」を発揮して活動することが想定される。表し方を考えて、考えたことの再現として表現するばかりではなく、表しながら考えたり思い付いたりし、その表し方を続けたり変化させたりするなど、造形に係る様々な行動が現れると考えられる。児童生徒がどのように感じたり考えたりしながら表現しているかについては、完成作品だけでなく、制作物の途中段階や制作中の児童生徒の表情やつぶやきを、丁寧に見取る必要があると考える。

なお、例えば、空を絵の具で描く中で、にじみの美しさを追究したくなった場合は、「空」という主題を「絵の具でにじませながら描く」という方法で解決に向け取り組んでいたが、「にじみ」という解決方法が、造形に係る活動の目的や取り組むべき主題そのものに変わるといった状況が度々現れる。「きれいな色のにじみを表すにはどうしたらよいか。」という課題に対し、水の調整や色の重ね方を工夫するという解決方法を考え実践し、一筆一筆評価しながら、次の方法を考えるというように、らせん状に学習が進んでいると考えられる。

音楽科では、課題とその解決方法がさらに一体となって学習が進むように捉えられる(表12)。「音楽作り」の項目においては、表したい主題に対し、メロディーやリズムなどの音楽の要素をどのように使うかなどの解決方法を考えるという、課題設定と解決方法の考察のプロセスをとるが、他の「歌唱」や「器楽」や「鑑賞」などの活動については、歌ったり、楽器で演奏したり、鑑賞したりしながら、音や音楽の面白さやよさを感じ取りながら聴くことが求められている。

〈表12 音楽科の目標のうち、「2 課題解決に向けた計画」との関連の大きい表記〉

音楽科	小学部			中学部		高等部	
	感じたことを表現することや、曲や演奏の楽しさを見いだしながら、音や音楽の楽しさを味わって聴くことができるようにする。			音楽表現を考えることや、曲や演奏のよさなどを見いだしながら、音や音楽を味わって聴くことができるようにする。		音楽表現を創意工夫することや、音楽を自分なりに評価しながらよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。	
	1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
	音楽的な表現を楽しむことや、音や音楽に気付きながら関心や興味をもって聴くことができるようにする。	音楽表現を工夫することや、表現することを通じて、音や音楽に興味をもって聴くことができるようにする。	音楽表現に対する思いをもつことや、曲や演奏の楽しさを見いだしながら音楽を味わって聴くことができるようにする。	音楽表現を考えて表したい思いや意図をもつことや、音や音楽を味わいながら聴くことができるようにする。	音楽表現を考えて表したい思いや意図をもつことや、曲や演奏のよさを見いだしながら、音や音楽を味わって聴くことができるようにする。	音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを自分なりに見いだしながら音楽を味わって聴くことができるようにする。	音楽表現を創意工夫することや、音楽を自分なりに評価しながらよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。

音楽的な見方で生活や社会の中の音楽的事象に気付いたり、価値を見出したりするという点では、「1 事象の捉えに関すること」との関連が大きい。その意味では、図画工作・美術科も同様に、生活や社会の中の造形的なよさや面白さを見出すことが、育成を目指す資質・能力として求められており、「1 事象の捉えに関すること」との関連が大きいと言える。

また、鑑賞したり、音楽表現や美術的な表現をしたりする活動を通して、音楽的なよさや造形的なよさを味わう経験を積み重ねる中で、豊かな情操の涵養を図ることが目標として挙げられている。このことは、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】以上に、【「思考力、判断力、表現力」を支える土台となる力】の、特に「周囲の事物や人に関心を向けようとする力」「興味・関心を深めたり広げたりしようとする力」「よりよいものにしよう、向上しようとする力」との関連が深いと考える。

小学部体育科と中学部高等部の保健体育科の目標にも、「課題」と「解決」の表記がある(表13)。

〈表13 体育科・保健体育科理科の目標のうち、「2 課題解決に向けた計画」との関連の大きい表記〉

体育・保健体育科	小学部			中学部		高等部	
	遊びや基本的な運動及び健康についての自分の課題に気付き、その解決に向けて自ら考え行動し、他者に伝える力を養う。			各種の運動や健康・安全についての自分の課題を見付け、その解決に向けて自ら思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。		各種の運動や健康・安全についての自他や社会の課題を発見し、その解決に向けて仲間と思考し判断するとともに、目的や状況に応じて他者に伝える力を養う。	
	1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
	体を動かすことの楽しさや心地よさを表現できるようにするとともに、健康な生活を営むために必要な事柄について教師に伝えることができるようにする。	基本的な運動に慣れ、その楽しさや感じたことを表現できるようにするとともに、健康な生活に向け、感じたことを他者に伝える力を養う。	基本的な運動の楽しみ方や健康な生活の仕方について工夫するとともに、考えたことや気付いたことなどを他者に伝える力を養う。	各種の運動や健康な生活における自分の課題を見付け、その解決のための活動を考えたり、工夫したりしたことを他者に伝える力を養う。	各種の運動や健康な生活における自分やグループの課題を見付け、その解決のために友達と考えたり、工夫したりしたことを他者に伝える力を養う。	各種の運動や健康・安全な生活を営むための自他の課題を発見し、その解決のための方策を工夫したり、仲間と考えたりしたことを、他者に伝える力を養う。	各種の運動や健康・安全な生活を営むための自他の課題を発見し、よりよい解決のために仲間と思考し判断したことを、目的や状況に応じて他者に伝える力を養う。

課題の発見や設定については、小学部段階では「自分の課題に気付く」と表記されているが、中学部2段階では「自分やグループの課題を見付け」、高等部では自他の課題を発見し」と表記されている。また、課題の解決に向けては、小学部では「その解決に向けて自ら考えて行動し」とあるが、中学部2段階では「解決のために友達と考えたり、工夫したり」、高等部では「仲間と考えたり」「仲間と思考し判断し」と表記されている。自分の課題からグループや他者との課題へと、自分で解決に取り組むところから、友達や仲間と考え、工夫し、判断することへと展開していることが分かる。健康や安全な生活は、個人だけでなく、生活集団やより広い公衆の課題であるということや、生涯学習の1分野としてスポーツに親しむ生活を想定し、仲間と協力し合う姿を目指すという体育科・保健体育科としての教科の特性と言える。

しかし、他者と一緒に課題の解決に向けて計画し実践する力の育成は、体育科に限らず学校教育全般における重要な使命である。特別支援教育においては、より丁寧な教育計画と支援のもとに育成を目指していかなくてはならない。その意味では、体育科・保健体育科の目標は【「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力】の「周囲の人と関わり、他者と気持ちを通じ合わせようとする力」「自分の思いや考えを調節しながら友達と協力して解決に取り組む力」との関連も大きいと考える。

(3) 「コミュニケーション」に関するものと学習指導要領各教科等の目標との関連

【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「3 コミュニケーションに関するもの」は、「思考力、判断力、表現力」の特に「表現力」であると捉えると、どの教科においても、「感じたことを伝える」「考えたことを表現する」等の表記がある。そのため、「⑭伝えたいことを発信する力」とは、どの教科とも関連が大きいと言える。

その他の⑮から⑯まで（表3）の「3 コミュニケーションに関するもの」は、一方的な発信や表現では成立しない、相手からの応答や対応を予測し期待しての発信であり、自分と相手とのやりとりが成立するものであると考える。国語科の「思考力、判断力、表現力等」の目標は、「伝える、表現する」ではなく「伝え合う」と表記されており、双方向のコミュニケーションを意味していることが分かる。国語科では「言葉」を介在することが前提だが、「伝え合う」ことに着目すると【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「3 コミュニケーションに関するもの」の「⑮様々な方法でコミュニケーションをとる力」と関連が大きいと考える。

また、国語科の目標のうち伝え合う対象に着目すると、小学部においては「日常生活における人との関わりの中で」、中学部では「日常生活や社会生活における人との関わりの中で」、高等部では「社会生活における人との関わりの中で」と表記されており、段階に応じてやりとりを行う対象が広がっていることが分かった（表14）。自分との様々な関係性にある人に自分の思いを伝え、関わり合うということは、相手に応じた言葉の選択やコミュニケーションの方法が求められる場合があり、その意味でも「⑮様々な方法でコミュニケーションをとる力」との関連が大きいと考えた。

〈表14 国語科の目標のうち、「3 コミュニケーションに関するもの」との関連の大きい表記〉

国語科	小学部			中学部		高等部	
	日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思考力や想像力を養う。			日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。		社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。	
	1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
	日常生活における人との関わりの中で伝え合い、自分の思いをもつことができるようにする。		日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思いや考えを伝えたりすることができるようにする。	日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにする。	日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。	社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。	社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げることができるようにする。

「⑯依頼の場面等で困っていることや必要な支援について説明する力」については、児童生徒が安心して生活していくために必須となる力として、「⑰自分から相談する力」と合わせて、意識調査グループの中でも特に検討が深められた。児童生徒が必要とする要求や依頼が正しく相手に伝わり、相手に受け止めてもらうためには、まず、自分が要求したいことや依頼したいことを児童生徒自身で把握していることが重要である。さら

に、その理由や必要性を相手が受け止めることができるように伝える必要も出てくる。これは、「1 周囲の事象の捉えに関するもの」の「⑤出来事や行動の理由や背景を説明する力」とつながると考える。

「⑤出来事や行動の理由や背景を説明する力」は、出来事や行動の理由や背景を捉える力として「1 周囲の事象の捉えに関するもの」であり、出来事や行動の理由や背景を、相手に伝わるように説明する力として「3 コミュニケーションに関するもの」であるとも捉えられる。

複雑な要求や依頼や自分の思い等を適切に伝えるには、「どのように伝えるか。」という思考や判断が必要となる。特に、その場で目に見えるものとは限らない出来事や行動の理由や背景や心情は、言葉（やシンボル）や文を複数用いて組み立てて発信する必要が出てくると考える。「国語科」の小学部3段階の「出来事の順序を思い出す力や感じたり想像したりする力」中学部1段階の「順序立てて考える力や感じたり想像したりする力」中学部2段階以降の「筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力」と関連が大きいと考える（表15）。

〈表15 国語科の目標のうち、⑤出来事や行動の理由や背景を説明する力との関連の大きい表記〉

国語科	小学部	中学部		高等部	
	日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思考力や想像力を養う。	日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。		社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う	
	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
	<u>出来事の順序を思い出す力や感じたり想像したりする力</u>	<u>順序立てて考える力や感じたり想像したりする力</u>	<u>筋道を立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力</u>		

この「出来事の順序を思い出す力」「順序立てて考える力」「筋道を立てて考える力」は、他者に分かりやすく伝えるためだけでなく、児童生徒が自分が経験して捉えた一連の出来事を深く理解するために必要な力であり、また、自分で直接経験したことではない事項についても、見たり聞いたり読んだりして理解していくためにも必要な力であると考えられる。さらに、理解したことを踏まえて「感じたり想像したりする力」の育成が求められている。他者とのやりとりの中で育成が図られるこれらの力は、「⑧自分の考えと他者の考えを見比べる力」との関連も深いと考える。

5 成果と課題

本稿では、本校職員の意識調査の回答を基に、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】と【「思考力、表現力、思考力」を支える学びに向かう力】を整理し、さらに【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】を、「1 事象の捉えに関するもの」「2 課題解決に向けた計画に関するもの」「3 コミュニケーションに関するもの」の3つの視点で整理した。次に、この【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】を中心に、特別支援学校知的障害各教科等の「思考力、判断力、表現力等」の目標との関連の分析を行ったところ、本校職員が考える【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】と、各教科の目標の関連は大きいと考えるに至った。

しかし、今回の分析では【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】で挙げたそれぞれの力を1つから3つ程度の教科の目標との分析を行ったが、そのような教科の取り上げ方では不十分だったと考える。例えば、「1 事象の捉えに関するもの」の「事象」に着目して、「①周囲の物事や変化に気付く力」と「②周囲の状況を受け止め、対応しようとする力」と関連の深い教科として「生活科」「社会科」「理科」を取り上げたが、「事象」としては、「生活や社会の中の音や音楽」、「生活や社会の中の形や色」も含まれ「音楽科」や「図画工作科・美術科」との関連なども考えられる。【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】と各教科の「思考力、判断力、表現力等」は、網の目のように複雑に関連し合っていると考えられる。これらの分析をより丁寧に行うことについては、今後の課題としたい。

本稿では、部分的な分析であったものの、1つの【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】は複数の教科と関連するということが分かった。このことから【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】は各教科の枠を超えた複合的な力であると言える。実際、児童生徒が現在及び将来の生活の場面において様々な課題に直面した際は、私たちがそうであるように、単一の教科で身に付けた「思考力、判断力、表現力等」で解決できることは、ほとんどないと思われる。よりよく生活していくために、様々な考えたり判断したり表現したりしながら、力を複合的に発揮して解決に向けて取り組もうとすると予測される。実生活で生きる【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】を育むためにも、教科横断的な視点が重要であることが分かった。

さらに、「2 課題解決に向けた計画に関するもの」との関連の大きい各教科の「思考力、判断力、表現力」について考察を進めると、「1 事象の捉えに関するもの」との関連が見えてくるなど、【伸ばしたい「思考力、判

断力、表現力】の3つの視点についても、それぞれ独立したものではなく、お互いが深く関わり合いながら成立していることが分かった。また、【「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力】との関連についても考えなければならないことが分かった。

今回、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】と、各教科の「思考力、判断力、表現力等」の目標との関連について考察したことは、今後の授業づくりに生かしていきたいと考える。まず、教科別の指導における「思考力、判断力、表現力等」の目標設定については、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】との関連が図られなければならないと考える。言い換えると、その目標が達成され、各教科の「思考力、判断力、表現力等」が育成されることが、児童生徒の現在及び将来の生活にどのようなよい影響を与えるのかを考えた上で、目標設定をしなければならないということである。また、活動内容としては、児童生徒が身に付けた力を実生活の中で生かすことができるように、生活の文脈において主体的に活動できるようなものにしていくことも重要となる。

各教科等を合わせた指導は、教科の枠を超えて生活の中からテーマを設定し、児童生徒が主体的に活動することをねらった指導形態であり、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の育成を図る有効な指導形態であるとする。特別支援教育においては、「各教科のどの内容を取り扱ったか」以上に「児童生徒一人一人がどんな力を身に付けたか」が重視される。本校では、単元を計画するにあたっては、単元の個人目標を設定し、3観点に沿った評価を行っている。【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】は学校生活全体を通して、卒業を見据えて長期的なスパンで育成されるものであるが、それぞれの単元においては、具体的にはどのような力を育むことであるのかを考えていかなければならない。その単元で育成したい「思考力、判断力、表現力等」及び一人一人の児童生徒につけたい力を考えるさいに、各教科の「思考力、判断力、表現力等」の目標を、具体的な目標や評価基準の指標の参考としていくことで、着実な力の育成を図ることができると考える。

(1) 成果

- ・教師間で【伸ばしたい『思考力、判断力、表現力』】を検討することができた。児童生徒が生活に生かすための力という観点でまとめることができた。
- ・教科の目標を丁寧に読み解くことで、私たちが考える【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の具体的な姿が見えてきた。また、より幅広く「思考力、判断力、表現力」とは何かについて考えることができた。

(2) 課題

- ・意識調査から【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】を3つの視点から整理したが、各教科の「思考力、判断力、表現力等」の目標と照らし合わせたことで、新たな視点をもって分析できるようになった。さらに教師間で検討しながら整理を進めていきたい。
- ・認知発達の段階や自立活動との関連や特別活動や道徳との関連がかなり大きいことが予測されるが、今回は分析することができなかった。今後、検討を深める必要がある。
- ・本研究を踏まえた目標設定や授業実践、学習評価等の実際の教育活動を通して、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】をさらに分析していく必要がある。

註

- 1) 生活単元学習の目標設定においては、児童生徒の生活上の課題やテーマから目標を設定することが求められるが、本校ではそのような単元の目標と各教科等の目標との整理ができていないため、各教科等の目標のみを設定している。本校の取り組むべき課題の1つとなっている。

【文献】

- ・佐賀大学教育学部附属特別支援学校研究紀要第20集(令和4年1月 佐賀大学附属特別支援学校)
- ・特別支援学校小・中学部学習指導要領(平成29年4月 文部科学省)
- ・特別支援学校学習指導要領解説総則編(平成30年3月 文部科学省)
- ・特別支援学校学習指導要領解説各教科等編(平成30年3月 文部科学省)